

菅野敬子（京都府宇治市）

タイトル「光の法則」

子供のように真っ白なままでいたいという人がいる。何色にも染まらず、いつまでも純真無垢なままでいたいと言う。でも、本当にそんなこと可能なんだろうか？

子供の持つ純真さが絵の具の白なら、大人の持つ優しさは光の白さだと私は思っている。絵の具は全て足すと黒になるが、光は白になる。生きている以上、真っ白なままでいられるはずはない。知らぬ間に自分の好きな色に染まっていくものだし、こちらが望みもしないのに横から勝手に赤や青を塗りつけてくる他人だっているだろう。子供の白さは純粹であると同時に無知である証拠だ。汚いことを何も知らないかわりに、色の美しさも知らない。まして世の中にはこんなにたくさんの色が存在するのだということを知らない。

だからその白さが失われてゆくことに悲観する必要はない。むしろ光の法則に従ってどんどん染まってゆけばいいのだ、文字通り色々に。第一真っ白なんて、汚れが目立ちそうで気を使ってしまう。原色一色で通す人は、ある意味格好いいけど、嫌な人には嫌だろうな、押し付けがましくて。そんなことより、どんな色でもどんどん受け入れてゆく。黄土色でも、パッションピンクでも、青だか緑だかはっきりしない色でも。そうして徐々に白い光に近づいてゆけばよい。

本当に優しい人は暗闇の中にも柔らかく包んでくれそうな光を放っている。しかしその光の中には、実は茶色やグレーや名前すらないような濁った色が混ざっているのだ。自らが輝こうと思うなら、世の中の矛盾、不条理、喜び哀しみ怒り楽しみ、全て受け入れる覚悟がいる。この人ならわかってくれるだろうと思うのは、おそらくその人が自分と同じ色を隠し持っているからだろう。

今の私はどんな色をしているのだろうか。これから様々な色に汚され、純化され、無色透明に近づいてゆく。あらゆる色を飲み込んだ優しい光を放つ人間になりたい。